

第一章・九月一六日、マムンド溪谷の戦闘

キャンプにラツパの音がする、それがどんなに冷たい朝の空気の中で鳴ることか

兵士に起床が命ぜられており、彼は暗いうちに起きて武装しなければならぬのだ

燃える太陽の光が君の上に来た時、君の信念と足元よ、確かであれ

戦線でライフルが打ち鳴らされ、

澄んだ音色で戦いのラツパが吹き鳴らされるそのとき

「下ベンガルでの訓話」A. ライアル卿

物語は今、私がクライマックスと見なさざるを得ないところへ差し掛かった。マムンド溪谷の戦闘は非常に多くの鮮明な出来事と永続的な記憶によって私には想起されるため、おそらくその真の歴史的な重要度以上の重みを持ってしまっていると思われる。読者にはその間ずっと私が個人的な視点と呼んでいるものを斟酌していただかなければならない。パノラマを大人数の軍隊が満たすことはない。百丁の銃の雷鳴が響くことはない。騎兵旅団が閃く剣を振り回すことはない。危機的地点に歩兵師団が振り当てられることはない。傍観者は丘の斜面だけを見るであろう。そして注意して見るならば、そこをゆっくりと動いている、風景の大きさの中ではほとんど見えないほど小さな茶色の服を着た数人の男たちを見ることであろう。この男たちが何をして何に苦しんでいるか／彼らの行動が何であり、その運命がいかなるものであるかを見るために、私は傍観者を十分接近させようと思っている。しかし私は書いたものの内容によって、自分が観察者としての役割を厳守していることを認めてくれるよう傍観者にお願いしたい。もし何らかの語句や文章によって私がこれから逸脱したことがわかったなら、私は巧妙な悪意によってそそのかされた何らかの悪に屈したことになるであろう。

一六日の朝、ピンドン・ブラッド卿の命令に従い、ジェフリーズ准将はイナヤット・キラの塹壕で囲まれたキャンプを出てマムンド溪谷に入った。彼の意図は、部隊の手の届く範囲にあるすべての防御設備のある村を燃やし、爆破することによって部族民を厳しく罰することであった。これを一日で完了し、その強さを見せつけた旅団は一七日にナワガイへ行進し、一八日と決まっていたベドマナイ峠への攻撃に参加することを期待されていた。結果的にはこの期待は空しかったわけであるが、これまで部族民から隊に対して真剣な抵抗がなされたことはなく、いかなる集会のニュースも將軍に報告されていなかったことを覚えておく必要がある。谷は見捨てられたように見えた。村は取るに足らず、無防備に見えた。どこにおいても敵が立ち向かってくることはないとは断定された。

起床ラツパは五時半に鳴り、六時に旅団は行軍を始めた。谷全体を一度に成敗するため

に、軍は三個の縦隊に分割され、次の任務が割り当てられた……

一・ピビアン中佐指揮、第三八ドグラ隊と数人の工兵からなる右縦隊はドモドロの村を攻撃しよう命じられた。二・ゴールドニー大佐指揮、バフ隊の六個中隊、シーク隊の六個中隊、工兵隊の半個中隊、第八山岳砲兵隊の四門の砲、および第一ベンガル槍騎兵隊の戦隊で構成される中央縦隊は、谷の最上部へ進み、バデライとシャヒ・タンギ（シャイツウンギと発音）の村を破壊しよう命じられた。三・メージャー少佐指揮、ガイド歩兵隊の五個中隊と数人の工兵で構成される左縦隊は谷の西端の村々に向けられた。

各大隊からの二門の砲と二個中隊がキャンプを守るために残され、ガイド隊の一／三の中隊が調査隊を保護するために切り離された。これにより戦野の歩兵の戦力は二三中隊に減少し、一二〇〇人をわずかに超えることになった。交戦していない第三八ドグラ隊の三〇〇人の兵を差し引くと、この作戦に使用された総兵力は、すべての武器を合わせて約一〇〇〇人であった。

最初に右の縦隊の運命を取り扱うのが好都合である。ピビアン中佐は六マイル行軍した後、午前九時頃にドロモロの村の前に到着した。彼はそこが敵に強固に守られていることに気がついた。砲や援護なしで攻撃するために自軍の戦力が十分とは思えなかった。そこで自重してキャンプに引き返し、午後四時ごろに到着した。二人の兵士が長距離射撃により負傷した。

中央の縦隊は私が加入したコール大尉の槍騎兵戦隊に守られていた。七時ごろ私たちは谷の北斜面の円錐形の丘の上に敵がいることに気づいた。騎兵にとって双眼鏡よりもはるかに有用な道具である望遠鏡を通してその姿を見分けることができた。青や白をまとった男たちの長いラインがあり、それぞれがその横に武器をまっすぐに立て、テラスにしゃがんでいた。情報はすぐにゴールドニー大佐に送られた。歩兵は戦鬪を熱望し、行軍を急いだ。騎兵隊は丘の一〇〇〇ヤード以内まで進んだ。しばらくの間、部族民は座ってその足元に広がる平地に軍隊が漸進的に展開するのを見ていた。そして砲と歩兵隊が近づくと彼らは向きを変えてゆっくり山の斜面を上り始めた。

彼らの動きを遅らせるか、戦鬪に誘い込むことを意図して、今や騎兵隊は速歩で近射程内に入り、下馬してちょうど七・三〇に発砲した。すぐに応射があった。丘の高い斜面から、基部のトウモロコシ畑から、そして村の塔から、少量の煙のパフがさつと吐き出された。敵は凸凹の地面に、兵士は墓地の墓石と木々によく覆われていたため、小競り合いはどちらの側にも大きなダメージを与えることなく一時間続いた。そのとき歩兵隊が到着し始めた。バフ隊はゴールドニー大佐の縦隊から切り離され、バデライの村に向かって動い

ていた。第三五シーク隊は長い尾根に向かって進んだ。その角のあたりにシャヒ・タンギが位置するのである。彼らが私たちの前をゆっくりと一むしる疲れて、迅速な行軍に疲れていたのである―横切ったとき、騎兵隊はよりふさわしい仕事を求めて鞍に跨り、走り去ったのであった。騎兵の武器―槍―を携えて。私はシーク隊と運命を共にすることになった。抵抗はほとんどなかった。数人の大胆な狙撃者が背の高いトウモロコシ畑から先頭の中隊に発砲した。他の者は山から長距離射撃を行った。どちらも損害を与えることはなかった。今やゴールドニー大佐はライダー大尉の配下の一・五個中隊に円錐丘を一掃し、連隊の右翼を山からの銃火から守るよう命じた。これらの約七五人の兵士が急な坂を登り始め、その日ずっと遅くまで再び彼らに会うことはなかった。残りの四個半の中隊は前進し続けた。進路は上へ上へと積み重なる丈の高い作物の段々畑を通る。軍隊はこれらを苦勞して上り、敵が守ろうとしたいくつかの塔から彼らを一掃した。半個中隊と仮包帯所が墓地の近くに残され、さらに二個中隊が支援のために丘の麓に配置された。他の二個中隊はシャヒ・タンギにつながる長い支脈の上昇を開始した。

丘の斜面で軍隊がどれだけ非常にゆっくり移動するのかわ、見ることなく実感するのは不可能である。村に到着したのは一時であった。敵は離れたところから「狙撃」したが、なんの損害も与えられなかった。誰もが戦わずに逃げた彼らの意気地のなさを罵倒した。村の一部と、刻んだわらの一種であるブーサの山に火を放ち、二個中隊はキャンプに戻る準備をした。

しかし八時頃、騎兵パトロール隊は谷の北西端に非常に大きな戦力の敵がいることを報告していた。そこでジェフリーズ准将はガイド歩兵隊に主縦隊への参加を命じた。「時間が記されているメッセーシの複写…」「ガイド歩兵隊を指揮している将校へ。―午前八時一分送信。午前八時五七分受信。敵はカンラに集まっている／直ちにゴールドニー大佐の左翼につくこと。C.パウエル少佐D. A. Q. M. G. (*副助補給将官)」「キャンベル少佐は馬にまぐさをやっていた部下を集め、ゴールドニー大佐の部隊の元へ急いだ。五マイルの行軍の後、彼は左翼前方で強敵と接触し、たちまち激しい銃撃戦になった。小銃射撃の音はバフ隊をバデライから呼び戻し第三五シーク隊の支援のために行軍させた。

両方の連隊が現場に急いでいる間、大きな発砲音が聞こえ、私たちのいるシャヒ・タンギ近くの支脈の頭は危険が迫っている場所の一つであることに私たちは初めて気が付いた。左翼への圧力が退却線を脅かし、一マイル以内からは支援が得られなかった。すぐに退却が命じられた。この時点まで、部族民はほとんど見られなかった。あたかも両中隊の退却が攻撃の合図であったかのように見えた。しかしこれは敵の全体的な前進の一部であって、もし退却が命じられていなかったとしても、先進中隊は襲撃されていただろうという考えに私は傾いている。いずれにせよ、情勢の局面はたちまち変わった。遠い丘の中腹から男

たちが素早く走り降りてきて、棚田から棚田へと飛び降り、岩から岩へと身をかわした。全員の発砲が増加した。退却を援護するために半個中隊が残った。次から次へと遮蔽となる田んぼに小さな突進を繰り返し、二人三人と接近してくる敵に対してシーク隊は優れた腕前を見せた。やがて約一〇〇ヤード離れたいくらかの岩の後ろにかなりの数の敵がたまった。発砲は今や激しくなり、半個中隊はその側面を脅かされているのに気づいて、次の陣地に後退した。

特異な地形を説明するために余談が必要である。

頂上に村があるその支脈は、三つの岩の小丘で構成されており、主丘に近づくにつれて、それぞれがお互いより高くなっている。これらは銃火によって両翼から見渡すことができ、開けた地峡によってつながっている。土地の断面はスイッチバック鉄道に似ている。

半個中隊はこれらの小丘のうちの最初の一つを損失なく立ち退き、次の小丘までの開放空間を素早く横断した。数人の兵士がここで倒れ、無事に運び去られたのではないかと私は思う。敵は最初の小丘に登って二番目の小丘を見渡し、銃撃を開始した。再び中隊は退却した。カッセルス中尉は約八人の兵士と共に背後に残り、残りが開放空間を横切るまで小丘を守った。撤退するやいなや、彼らは中尉に退却を叫んだ。彼は命令を下した。

ここまでの朝の小競り合いは神経病者に喜びを、兵士に経験を、ジャーナリストに「ネタ」を与えたかもしれない。今や突然黒い悲劇が現場に現れ、多数の鮮烈な些事の中にすべての興奮が消えた。カッセルス中尉は小丘を去るために立ち上がったとき、鋭く向きを変えて地面に倒れた。二人のセポイがすぐに彼を掴んだ。一人が足を撃ち抜かれて倒れた。発砲を続けていた兵士が空中に飛び上がり、落下して見たこともないほど恐ろしい速さで口と胸から出血し始めた。他の者は足を蹴り出し、体を捻って仰向けに倒れた。四分の一はまったく静かに横たわっていた。こうして書いている間に小さなパーティーの半数が殺され、負傷した。敵は両翼に回り込み、また見渡していた。その銃火は正確であった。

サバダー少佐であるマンゴル、シンという名の二人の将校と、三―四人のセポイが二番目の小丘から負傷者を運び去るのを手伝うため前方に走った。彼らが現場に到着する前に、さらに二人の兵士が撃たれた。サバダー少佐はカッセルス中尉を掴んだ。彼は血に染まり、立つことができなかったが、戦線に留まることを切望した。他の者は負傷者を掴み、悲鳴とうめき声にもかまわず、尖った岩の上を乱暴に引きずり始めた。私たちが小丘から三〇ヤードも離れないうちに敵はそこへ突進し、発砲し始めた。連隊の副官であり、辺境で最も人気のある将校の一人であるヒューズ中尉が殺された。弾丸は唇の間に空気を吸い込むときのような奇異な吸収音で空中を通過した。数人の兵士もまた倒れた。ブラッドショー

中佐は將校の体を運び去るよう二人のセポイに命じ、彼らはそれを始めた。突然、大勢の部族民がバラバラと丘の稜線に駆け寄り、剣を手に、大きな石を投げつつ突撃してきた。冷静な観察者であり続けることは不可能となった。数人の負傷者が振り落とされた。サブダー少佐はカッセルス中尉を守り、中尉は彼に命を負っている。他の將校を運んでいた兵士たちはそれを振り落として逃げた。体が地面に大の字になった。その上を汚い白い亜麻布を着た長身の男が湾曲した剣で急襲した。それは恐ろしい光景であった。

劍士たちが深く突撃していたなら、全員が切り伏せられていたであろう。しかし、彼らはそうしなかった。これらの荒々しい山の男たちは、取り囲まれることを恐れていた。退却は続いた。今や集中していた二個中隊は五―六回立ち向かおうと試みた。部族民はその度に両翼を圧迫した。彼らは地の利をすべて持ち、側面を包囲されたシーク隊と同程度を見渡していた。やがて支脈の底部に到達した。二個中隊の生き残った兵士は装着された銃剣とともにヌラーの中で反撃に転じた。部族民は勢いよくやって来たが、三〇ヤード離れて停止し、怒号し、発砲し、剣をひらめかせた。

おそらく突撃の後であろう―散開した戦隊縦列で後退している私たちの騎兵隊を除いて、他の軍隊は見えなかった。彼らの援助を得ることはできなかった。バフ隊はほぼ一マイル離れていた。事態は重大であった。ゴールドニー大佐自身が兵を再編成しようとした。おそらく六〇人程になったシーク隊は強く圧迫され、発砲したが効果がなかった。そのとき誰かが―誰だったかは不確かであるが―ラツパ手に「突撃」を鳴らすよう命じた。甲高い音が鳴ったのは一回ではなく、十数回であった。全員が叫び始めた。將校たちは必死に剣を振るった。そしてシーク隊は気合をかけつつ敵に向かってゆっくりと前進し始めた。最高の瞬間であった。部族民は向きを変えて退却し始めた。兵士たちは即座に強固な銃火を放った。自らを苦しめた者を猛烈に撃ち倒したのである。

私はそのとき初めて、反攻は前線全体で行われたものであると感じた。私が記述したのは単なる小事件である。しかし読者は記事から辺境戦争における多くの損失の意味を知ることができない。勇敢で良く武装しているが、負傷者を抱え、登りに疲れ果て、数に勝る軍勢に圧倒された部隊が退却を命じられた。これは弱い軍隊には達成が難しすぎる作戦である。近くに支援がない限り、彼らは厳しく痛めつけられなければならない。敵を阻止するために残る小さな援護パーティーは非常に頻繁に寸断され、撃ち倒される。後にマムンド溪谷ではこの二個シーク中隊が試みたことを成し遂げるため、大隊全体が用いられた。しかしシーク隊の勇氣には証人の必要はない。

支脈を退却している間、私は戦闘の全体的な局面を観察することができず、今それを記述する際に一つの小さな部隊の不運だけを取り扱った。それは個人的な視点によるもので

ある。二個の先進中隊が丘を駆け降りている間に、少なくとも二〇〇〇人の部族民が旅団の左前面全体に沿って総攻撃を行い、そのほとんどがライフルで武装していた。騎兵隊、第三五シーク隊の二個の支援中隊、および到着しつつあったガイド歩兵隊の五個中隊がこの攻撃に抵抗した。全員が交戦した。旗印を誇示しつつ、大いなる勇気を持って敵は激しい銃火の真っ只中を前進してきた。多くが殺され負傷したが、彼らは軍隊との間の長い小競り合いの戦線を前進し続けた。第三五隊の一個中隊が深刻な影響を受けるようになった。これを見てコール大尉は指揮下の戦隊を前進させ、地面が荒れていたにもかかわらず突撃をかけた。敵はヌラーに避難し、その中に旗印とすべてを投げ出した。そして近距離で騎兵隊に鋭い銃火を放ち、数頭の馬と人に命中させた。戦隊は退却した。しかし彼らの前進の精神的効果は絶大なものであった。攻撃全体が停止した。歩兵隊は銃撃を続けた。その後、部族民は退却し始め、一二時ごろに撃退された。

今、戦闘を中断する機会が訪れた。旅団はバラバラでキャンプを出発し、深刻な抵抗はないであろうと予想していた。軽率に前進していた。先進部隊は無造作に指揮されていた。敵は猛烈な反撃を行なった。その攻撃は撃退されて完敗に終わり、旅団は集結した。歩兵隊がさらされていた疲労を考えると、おそらくキャンプに戻って翌朝再び始めた方がより賢明であったであろう。しかしジェフリーズ准将はシャヒ・タンギの破壊を完了し、敵の手に残されたヒューズ中尉の遺体を回収することを決意した。それは大胆な方針であった。しかしそれは軍のすべての将校によって承認された。

二回目の攻撃が命じられた。ガイド隊は左翼の敵を食い止めることとされた。第三五シーク隊に支援されたバフ隊は村を占領することになった。可能なすべての部隊は戦野の縦隊に加勢すること、という命令が信号によってキャンプへ送られ、その結果六つの新しい中隊が出発した。前進が始まると砲は旅団の右側の尾根で戦闘を始め、継続的に村を砲撃した。

再び敵は「狙撃」に戻り、その姿はほとんど見られなくなった。しかし丘を登るのには二時間かかった。村は三時に占領され、バフ隊によって完全に破壊された。三・三〇にキャンプへの帰還命令が届き、二回目の撤退が始まった。敵は再び力強く迫ってきたが、今回は二個ではなく一〇個中隊であり、後衛のバフ隊がリー・メトフォード・ライフルによってすべてを遠ざけた。五時一五分前に軍隊は丘を離れ、私たちは自分の周囲を見回した。

この二回目の攻撃が行われている間に午後は過ぎ去った。およそ二時頃、辺境で申し分ない経験を積んだキャンベル少佐とコール大尉は部族民との渡り合いをその日のうちに終わらせることができないという事実気付いた。彼らの提案で砲の近くの支脈の將軍の参謀將校へ次のようなメッセージが回光通信された。「今の時間は二・三〇である。帰途にお

いても戦わなければならないことを覚えておかれたし。」しかし准将はすでにこの可能性を予見しており、前述のとおり帰還命令を出していた。この命令は増大する敵の攻撃に強く圧迫される最右翼のライダー大尉の中隊には届かなかつた。負傷者が彼らの退却を遅らせた。おそらく高所を取ろうと考えたのであろうが、彼らは山腹をはるかに押し上げ、今や私たちは二マイル離れた空の輪郭線上に熱く戦う彼らを見ていた。

私が一時停止を利用してポニーに餌をやったり、水をやったりしていた時、第一六槍騎兵隊のマクナツテン中尉が彼らについて私に指摘し、私たちは望遠鏡を通して彼らを見た。それは奇妙な光景であつた。入り乱れて走り回る小さな人物、小さな煙のパフ、空を背景としてシルエツトになつた剣を振るうミニチュア将校。彼らが命がけて戦つていた、あるいは実際に何らかの危険にさらされていた、と信じることは不可能に思えた。それはすべてとても小さく非現実的に見えた。しかし彼らは強く圧迫され、弾薬筒が不足していることを示していた。そのとき、時間は五時で北の山々に集まる重い雷雲によって暗闇の接近が加速されていた。

三・三〇頃、准将はガイド隊にライダーの支援に赴き、中隊の救出を試みるよう命じた。キャンベル少佐に自身の裁量で行うように指示したのである。それは難しい問題であつたが、ガイド隊とそのライダーにとつても同じことであつた。彼らはその日の始めには左翼端にいた。次に中央へ急行した。そして今右翼端への命令を受けた。彼らはすでに一六マイルを行軍していたが、まだ元氣であつた。私たちは感心してその一列の行軍が前を横切つて行くのを見ていた。一方、旅団の退却は遅れた。すべての部隊がお互いをサポートする必要があり、軍隊はガイド隊がライダーを救出するのに成功するまで待たなければならなかつた。今や敵は一日中群れていた溪谷の北西端から大兵力でやつて来た。それゆえ戦闘は初めて壮観なものとなつた。

旅団全体は広い平野を横切る梯陣をなしていた。右翼端ではライダーの中隊とガイド歩兵隊の両方が激しく交戦していた。砲兵隊の左後方○。五マイル離れたところで第三五シーク隊の二個中隊と工兵隊がゆつくりと後退していた。さらに左には第三五の残りがいて、○。五マイルの間隔をおいてバフ隊がいた。騎兵隊は最左翼を守つた。この長い軍隊は互いを目視ができたが、平地全体を横切る深く広いヌラーによつて分断されており、ゆつくり後退し、接触を保つために頻繁に停止した。七〇〇ヤード離れたところに約三マイルの長さの大きな半月隊形で現れ、絶え間なく発砲してくる敵がいた。彼らの火力は効果的であつた、そして、このとき他の犠牲者とともに王立砲兵隊のクロフォード中尉が殺された。彼らの姿は小さな白い点の列のように見えた。すぐに暗闇が落ちてきた。煙のパフは銃火の閃光になつた。大きな黒い雲が谷を覆つて広がり、雷がごろごろと鳴り始めた。日光は消え失せた。全体像がはつきりしなくなり、すでに真っ暗になつていた。すべての連絡、

すべての相互支援、すべての全体的統制が停止した。各部隊は間隔を詰め、約七マイル離れたキャンプへの行程に最善を尽くした。激しい雷雨が頭上を襲った。鮮やかな稲妻が縦隊を照らし出し、敵が照準を合わせる事が可能になった。個々の部族民はバフ隊の五〇ヤード以内まで走り寄り、侮辱の言葉を叫びつつライフルを発射した。彼らはイギリス兵の限られたパシウトウ語の嘲りと注意深い一斉射撃で応答された。軍隊は最大の安定性を示した。兵たちは肚を据えており、士官たちは元氣よく、射撃は正確だった。八時半に敵は私たちを煩わせなくなった。私たちは彼らを追い払ったと思っただが、彼らはもつと良い獲物を見つけていたのであった。

キャンプへの最後の二マイルは苦痛であった。射撃の終了後、兵士たちは疲労を自覚した。バフ隊は二三時間継続して行軍し、戦っていた。彼らは前夜以来、早朝のビスケットを除いて、食事をしていなかった。その中の年配で経験豊富な兵士たちは、トラブルに笑い、帰ったら朝食、夕食、お茶を一緒にすると宣言した。若い兵士たちはあらゆる方向に倒れ込んだ。

将校がライフルを運んだ。使用できるポニーやラバは、疲れ果てた兵士を乗せていた。これもすべてではなかった。他の軍隊が私たちの前を通り過ぎた。さまざまな連隊の一ダース以上のセポイが道端に人事不省で横たわっていた。これらはすべて最終的に後衛によって運ばれた。バフ隊は九時にキャンプに到着した。

その間、ガイド隊は孤立した中隊の生き残りを敵の手から救い出すという素晴らしい戦功を挙げた。急いで行軍した後、彼らはライダーの部下が後退していた丘のふもとに到着した。そのシーク隊員たちはその日の行使によって完全に疲れ果てており、混乱しており、多くの場合、極度の疲労によって武器を使用することさえも不可能であった。部族民は戦闘中の中隊の両翼と後方に大勢で取り付き、絶え間なく発砲し、踏み込んで個々の兵士を切り倒しさえした。将校は二人とも負傷していた。ガニング中尉は、弾丸で三か所を撃たれ、さらに二か所を深く剣で切られながら助けを借りずに丘をよろめきながら下った。疲れ、さらに数において劣勢で、三方向を囲まれ、無傷の将校がおらず、弾薬筒がないのであれば死は時間の問題である。全員がバラバラに切り刻まれていたはずであった。しかし今や助けが近づいていた。

ガイド隊は戦線を形成し、銃剣を装着し、丘に向かって駆け足で前進した。その基部から少し離れたところで、彼らは止まり、勝ち誇る敵に対して恐るべき圧倒的銃火を放った。戦野全体でその中隊の一斉射撃の大きな爆発音が聞こえ、煙が見られ、左翼の私たちは何が起きているのかと思った。急に停止させられた部族民はたじろいだ。中隊は退却を続けた。夜が近づくとともに多くの勇敢な行為が行われた。ガイド隊のアフリデイ（*カイ

バル峠付近を本拠とするパシヤン人の一部族)中隊のハビルダー、アリ・グルは大きなポケットのあるゆったりしたジャケットのようなキャンバス地の弾薬筒キャリアアを掴み、その部下のポーチから抜き取った弾薬でいっぱいにした。そして連隊とシーク隊の間の銃火が吹き荒れる空間を突進し、悪戦苦闘している兵士たちに貴重な包みを配布した。彼は戻る際に負傷した現地將校を背負っていた。これを見たガイド隊の数人のアフリディたちは、叫び声を上げて気合をかけつつ救助のため前へ走った。他の負傷したシーク隊員たちは彼らの勇敢さによって恐るべき運命から救われた。ついにライダーの中隊は丘の基部に到達し、生存者はガイド隊の援護の下で再編成された。

この寄る辺なく、暗闇と距離によって旅団から分断され、三方から敵に攻撃された彼らは冷静にキャンプへの血路を開く戦いを進めたのである。多くの負傷者たちに動きを妨げられ、荒れた地面の上で、彼らはあらゆる攻撃を撃退し、その退路を絶とうとする部族民のすべての試みを打ち負かした。彼らは面目をほどこして安全に九・三〇にキャンプに到着した。將校の技量と経験、兵士の忍耐と気迫が、多くの人々が不可能だと思った任務の達成を可能にしたのである。そしてマムンド渓谷の戦闘における彼らの働きは素晴らしい最も有名な辺境連隊の歴史の輝かしい一ページを埋めることとなった。「最も前面に立った二個中隊の二人の將校、ホドソン大尉とコドリントン中尉の武勇はデイスパッチにおいて特別に言及される主題となり、後にジェフリーズ准將は連隊の優れた功績を称賛した。」

バフ隊がキャンプに到着すると、それまで降りそうで降らなかった雨が降ってきた。降りには激しかった。闇は濃かった。キャンプは泥の海となった。ジェフリーズ將軍は敵襲を予想して外周を縮小するよう合図した。そのためキャンプのサイズは元の半分まで詰められた。

ほとんどのテントは打撃を受け、地面に山をなして一緒に積み重ねられた荷物とともに倒れていた。輸送動物の多くは解き放たれて込み合った場所を徘徊していた。夕食やシエルターはなかった。兵士たちは徹底的に疲れ果てて、夕食抜きでぬかるみの中に横たわった。負傷者の状態は特に痛ましかった。打撃を受けたテントの中にはいくつかの野戦病院があった。気の毒な仲間のために暗闇と雨の中で包帯を直し、モルヒネ注射をする以上のことは不可能であり、最後の者がドーリー(*インド式駕籠)で運びだされたのは翌日の午後四時であった。

約一時間後に雨は止んだ。將校が眠りにつく前の部下に何か食べさせようと忙しくしている間に、すべての部隊がキャンプにいるわけではないことが判明した。將軍、砲兵中隊、工兵隊、四個の歩兵中隊はまだ谷にいた。まもなく私たちは銃声を聞いた。彼らは攻撃されておろ—おそらく圧倒されている。彼らに援助を送ることは、より軍隊が遮断されるリ

スクを負うことであった。バフ隊は疲れ果てており、最も深刻な損失を被ったシーク隊、そして一日中行軍して戦っていたガイド隊は考えられなかった。しかし第三八番ドグラ隊はかなり元気であり、將軍の不在下で指揮をとるゴールドニー大佐はすぐに四個中隊を整列させ、救助のための行軍を命じた。コール大尉は、彼らに数十騎のスワールを同行させることを申し出た。馬に鞍が置かれた。しかし命令は取り消され、その夜軍隊がキャンプを出ることはなかった。

この決定が正しかったかどうかは読者に判断してもらうことにしたい。暗闇と荒れた地面のために救援隊が將軍を見つけれられない、というのもありうることである。彼らがヌラーに巻き込まれて打倒されていた可能性もある。キャンプ本体の守備も多すぎるわけではなかった。敵の数は不明であった。こうしたことが主な理由であった。一方、数マイル離れた谷で戦友が命がけで戦っていることを時折の銃声に思い出させられつつ、私たちが眠れつつために横になっていることは兵士らしい振る舞いとは思えなかった。